

平成27年度 第2回 富山高等専門学校 運営諮問会議 議事概要

日 時：平成28年2月10日（水）午後2時～午後4時

会 場：富山高等専門学校本郷キャンパス大会議室

【会議次第】

1. 開会挨拶

2. 出席者紹介

3. 議 事

[1] 平成28年度入学試験の状況について

[2] 平成27年度進路状況について

[3] 富山高等専門学校 平成27年度 年度計画実施状況について

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置

1. 教育に関する事項

(1) 入学者の確保

(2) 教育課程の編成等

(3) 優れた教員の確保

(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム

(5) 学生支援・生活支援等

(6) 教育環境の整備・活用

2. 研究や社会連携に関する事項

3. 国際交流等に関する事項

4. 管理運営に関する事項

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

III 予算（人件費の見積もりを含む，収支計画及び資金計画）

[4] その他

4. 閉会挨拶

【出席委員】

〔敬称略，順序不同〕

遠 藤 俊 郎（富山大学長）
松 本 三千人（富山県立大学副学長・工学部長）
及 川 武 司（一般社団法人全日本船舶職員協会専務理事）
大 坪 昭 一（富山県商工労働部長）
高 木 繁 雄（富山商工会議所会頭）
久 和 進（北陸電力株式会社代表取締役会長）
池 田 茂（富山高等専門学校同窓会会長）
<代 理>
伊 藤 茂（朝日印刷株式会社常務取締役管理本部長）
（濱 尚 富山高等専門学校技術振興会会長）

【欠席委員】

石 出 宗 人（富山県中学校長会会長）
金 岡 純 二（公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長）
杉 野 太加良（株式会社スギノマシン代表取締役社長）
市 川 吉 晴（立山マシン株式会社事業推進室理事）

【富山高等専門学校出席者】

石 原 外 美（校長）
西 田 均（副校長）
新 開 純 子（副校長）
成 瀬 喜 則（校長特別補佐）
西 敏 行（教務主事）（本郷）
中 谷 俊 彦（教務主事）（射水）
青 山 晶 子（学生主事）（本郷）
塚 田 章（学生主事）（射水）
高 熊 哲 也（寮務主事）（本郷）
梅 伸 司（寮務主事）（射水）
阿 蘇 司（副専攻科長）
小 林 正 幸（総務課長）

西野伸一（管理課長）
石田芳邦（学務課長）
竹腰貢三子（総務課課長補佐）
船崎浩之（総務課課長補佐）
穴田さおり（総務課課長補佐）
新木裕一（総務課主査）
錦織 掌（総務課主査）

議 事

〔1〕平成28年度入学試験の状況について

〔2〕平成27年度進路状況について

【石原校長】

- 平成28年度志願者倍率は3.4倍。平成24年度と同レベルである。志願者の人数は平成27年度と比べると100人ほど増加している。この理由を今後分析したい。
- 本校を受験する学生は県内中学校全体のうち8%。志願者数が他の高専に比べて非常に多いのは本校が併願という形をとっているからである。県立高校と高専を両方同時に受けられるという仕組みにしている。
- 10年後、中学生の数が約10万人減少することがわかっていて今の段階から工夫する必要があると思う。
- 学科を卒業した学生は進学者が約半数で残り半数が就職する。県外就職と県内就職が大体拮抗している状況である。
- 専攻科の修了生は修了した時点で学士号が取れる。約3分の1が大学院へ進学し、残り3分の2は就職する。就職者のうち約半分が県内就職、約半分が県外への就職である。エコデザイン工学専攻の修了生はかなりの割合で製造業に勤めている。東大の大学院や東工大大学院へも進学している。将来的には、専攻科の学生が外国の大学院へ行くことも目指していきたい。

【委員】

入学試験の受験者が去年よりも100人近く増えた理由をどのように考えるか。

【石原校長】

1つは、進学校の滑りどめとして受ける学生が増えたのではないかということ、2つ目

は、本校のプレゼンスを高めるためにいろいろなところにPRをしてきた効果が出てきているのではないかと思われる。

【委員】

- 受験者数が増えたのはPRを強化された成果かもしれない。
- 就職に有利な面で高専に進学するという社会的動きが出ているのかもしれない。
- 入学者が一体どのくらいになってくるか、そのところで答えを出していかないといけないだろう。
- 入学生の出身地の比率は県内がかなり高いのに対して就職が県内外が半数ずつということとはかなり流出しているということである。

〔3〕富山高等専門学校 平成27年度 年度計画実施状況について

【石原校長】

- 一昨年から、中学校の校長に本校の見学や意見交換をしている。平成27年度は射水キャンパスに招き、意見交換等をした。このほか志願者対策として、年2回、本校のPRのために教員が中学校を訪問している。
- 本校が活動している実績をテレビや新聞、文教速報等を通じて広報し、PRに努めている。
- 高専機構は今年からマークシートによる試験を導入し、中学校等に説明をした。
- 専攻科の教育課程の内容について定期的にレビュー審査を受けている。いずれの専攻もレビュー審査で「適」の判定を受けた。
- 特例適用専攻科という制度があり本校は特例の適用認定を受けた。学士の学位授与申請について、学修成果に関する試験が免除され、提出書類が簡略化されることになった。
- 英語教育等が重要ということでTOEIC受験を進めている。専攻科における英語力向上の取組みとして、講義の内容のビデオを作成して学生に英語で見せて講義をしている。
- 新任教員にメンターを配置して授業のやり方や校務の仕方等を指導している。
- 本校の教員を定期的に海外の高等教育機関に派遣することとした。2カ月程度、毎年のように2、3人の計画で、次年度から派遣する予定である。
- 定年になられた方で教員として人格的にもふさわしい方を特命フェローとして雇用した。
- COC+の取組を進め、また富山大学との間で専攻科生の大学院への進路で包括協定を結んだ。大学コンソーシアム富山を中心に富山県内の大学と積極的に協力をして成果を

あげるようにいろいろ工夫した。

- 女性スマイル・アップ推進委員会を中心に、女性教員の増加を進めている。本校は全国の高専の中では2番目の多さである。女子大学院生のインターンシップも実施している。
- 80%の学生がインターンシップに参加している。かなり高率のところではインターンシップの学生がいるという状況で実践教育を促している。
- 研究力を高めるために学科や研究グループ単位の複数の者で科研費の申請を積極的に取り組んだ。
- 海外の高等教育機関と連携して教員の招聘、派遣を行い教育力の向上に努めた。
- 今年の3月に、南砺市で小水力発電のコンテストを実施する。学生に対していわゆる問題解決力を育むような試みである。
- タイのキングモンクット工科大学「KMITL」と国際会議を開催した。今年の3月には、中国瀋陽にある東北大学とも国際セミナーを開催する。本校独自の活動である。
- 製品開発・社会貢献本部を立ち上げ、社会貢献・地域貢献を進めている。中小企業の方が新しい事業を展開する際に本校が支援するというスタンスで取り組み、同時に外部資金を稼ぐという体制である。

【委員】

- 入学生に対して何が受験の決め手になったのかを調査しているのか。入ってきた学生に対して意見を聞き、入学者の確保に関する取組みをより具体的な形で生かせるようなものが出てくるのではないか。
- 学生による授業評価のアンケートは、学生のアンケート疲れや結果の処理に負荷がかかる。少し注意深く対応されるとよい。
- 短期研修や海外の高等教育機関への派遣制度は、教員にとって非常に魅力的な制度だと思う。周りの先生がどうフォローするか、その辺をうまくやりながら優秀な教員の確保の一つの売りとして進めると非常によい。
- 基礎学力が不足している数学や物理などの補充授業の実施は中学校の先生方にとっては随分安心できる。近県を含めた県外の中学校へのアプローチの一つの手段となる。
- いわゆる技術的な知識はベースとして重要だが、工場長などの管理職立場になったときのための経営学的な授業があってもよいのではないか。
- 非常に進学率が高いところをもっとアピールすれば保護者からも信頼されるのではないか。

○出口をいかに充実させるかは、優秀な学生を入学させるための方法としてこれからますます大事になっていく。

○志願者が増えているということで一番効果があったと思われることは何か。

○商船学科は今後また県外の学生を募集してほしい。特に石川、新潟は船乗りの育ちやすいところであると思う。努力していただきたい。

【石原校長】

○志願者が100名ほど増えたのはPR効果が徐々に出てきているところと思う。一方で推薦入学の志願者は減っている。滑りどめの比率が増えてきている可能性はあると判断している。

○商船系は5.5年の課程である。編入学の場合次の年にかかってしまいこれが一つのネックになって出口の雇用がうまくいっていない。商船系はライセンスを与える学科で教育のコストが非常に高い。高いコストをかけていながら、卒業生が商船系、船会社へそれほど勤めていないことについて総務省からの強い意見があり非常に厳しい状況がある。その状況を打破するために、県外も含め様々な形で広報活動に努めていきたい。

○海外の展開については、去年50周年記念式典で海外機関の方を招いたところ、アイルランドの大学とタイの大学が親交を深め事業を予算化して一緒に進めようという話が出てきた。また、ハンガリーの3つの大学では本校が仲立ちになって交流が進むという状況も出てきた。学生同士も同じような活動が続ける中でそういった機運が出てくると思っている。

【西教務主事】

○志願者対策室が1年生全員にどういことがきっかけとなって高専に入学したかを調査したが答えがなかなか分からないというのが現状である。

【議長】

○入試の分析等々の意見があったが、学校で今後検討して次の発展につなげていただきたい。

【委員】

○外部資金獲得への取組を積極的に行っていることを評価する。

○企業との共同研究として富山県新世紀産業機構の研究開発助成制度の活用も検討されたい。

○富山県の「夏休みこども科学教室」に高専の協力を得ており、引き続き協力願う。

- 高専本来の実践的な技術者の養成という役割がある。いわゆる現場のリーダーとなる人材を引き続き養成していくという役割もぜひお願いしたい。業界の方ではそういった人材が必要だ。
- 地元企業の良さを引き続き情報提供して十分な情報の中で就職の進路の選択ができるような形をとってほしい。
- ARでスマホやアイパッドからホームページにアクセスする『産業観光図鑑』を作った。そのホームページを見て、学科専攻と自分の思いと比べてみてインターンシップ先を選ぶようにすれば非常におもしろいと思い作成した。「リクルート探求コース」というものも作ろうと思っている。こうしたものを活用してはどうか。
- 企業のニーズと学校のシーズが上手くマッチングしていない。ニーズとシーズを把握する努力を、大学、高専と一緒にやっていく機会としてビジネスマッチングがある。学科ごとにブースをつくり、どんな研究をしていてどんなシーズがあるのかということ発信すれば関心を持つ者も出てくる。

【石原校長】

- 科研費の獲得、共同研究をさらに進めていきたい。予算が削減されて学校運営の苦しい部分を何とか補いさらに増やすという方向で考えている。そのため、教員が直接工場へ見学に行く、あるいは学生を連れていく、コーディネーターを雇用して定期的に企業訪問して情報交換をすることを実施している。
- 実践的技術者というニーズがあることは十分承知している。高専の特色として残しながら少し高度化を図っていく部分もつくっていかないといけないだろうと思っている。
- 社会貢献はやはり実績を上げていく必要がある。いただいた要望に対してしっかりと応えていく必要がある。
- 『産業観光図鑑』の活用はいろいろと教えていただいて本校のホームページ等で反映できればありがたい。地元の良い企業の技術レベルが分かれば、地元定着もできてくるかもしれない。ニーズとシーズということでお話できればありがたいと思っている。

【委員】

- 高専として何を狙いに国際交流をやるのかということはある程度はっきりイメージしながらやらないといけない。長いお付き合いのところは大事にされるとよい。
- 学生のTOEICの受検はどの程度のレベルを目標にしているのか。
- 国際交流は企業なり社会の要求を十分認識して、どういう国際交流、教育目標を設定す

べきなのかということ意識していくとよい。

【石原校長】

- 学生は外国へ行くと刺激を受けて短時間でかなり変わるケースがある。多面的な視点に気づく一つのチャンスにしてほしいと考えている。また、相手の立場に立ってものが考えられるかが大事だろうと思っている。単に語学力を高めるだけが目標ではなく、その気づきになってほしい。
- TOEICは、国際ビジネス学科の学生で600点程度を目標にしている。900点に近いレベルの学生もいる。これはトップレベルである。工学系はまだ400から450点程度で普通の大学と同じレベルかもしれない。
- 本校学生とタイ国のカレッジの学生が一緒になってタイ国内にある富山の地元企業へのインターンシップをやっている。英語で説明が上手くいかない時に現地学生が本校学生にトランスレートしてくれ、地元企業に役立っている。また逆に学生が富山にきたときに地元企業の工場見学等をお願いしている。タイ国に戻ってからタイの富山県企業の工場に勤めることもあり得る。そういった仲立ちができるのも一つの副産物かもしれない。
- 本校は来年度機関別認証評価を受けることになっておりアンケート調査をした。これから本校がカリキュラムを改善しないといけないという一つの参考データとしてとった。
- 教育全体では80%ほどは満足だが一般教養については普通程度、専門分野の知識は、かなり満足しているとの結果がでた。卒業研究等が職務遂行に役立っているかは半数程度が役に立っていると回答している。しかし、外国語教育は3分の1の者しか評価していない。創造的な教育については、カリキュラム等に工夫の必要があると思う。また、卒業研究や実験実習等が非常によかったと評価を受けている。英語の学力が足りない、コミュニケーションの能力が足りないという意見が出た。

【議長】

- 高専の建学精神に立ち帰って、日本の産業界を支えるという点で大学とは違う高専のあり方をどう作っていくのが高専の課題である。
- 大卒の給与体制と高専卒の給与体制は改善されつつあると思うが、何年前までは明らかにギャップがあった。当然ながら高専生は大学卒業後に就職をと考える。その辺のところも課題として企業側に検討いただきたいところである。
- インターンシップは重要で、まさに現場を知るようなものにしていかないといけない。その経験が次の就職や進路につながるものにならないといけない。

【委員】

- 幾つかの企業と教員が一緒になって企業を訪問してその中からインターンシップ先を選ばせ、一生この道でいきたい、これで頑張ろうと思わせる体制にされるといい。
- 富山高専の卒業生が県内の産業界で活躍されている。そうした卒業生を順番に招いて話をエクステンションプログラムで学生さんが聞く。その中で自分の将来の道を見出し、学問に対する情熱をつくっていくと地域とのパイプが太くなるのではないか。
- 離職率が高い原因が「企業に入ってやりたかったことをやらせてもらえない」ということではないかという話もある。柔軟性を持って世の中に対応していけるような人をぜひ育ててほしい。
- インターンシップではきれいなところを見せる必要は全くない。雑用をしなくてはならない、そういうところをみせるように企業側も工夫しないといけない。

【石原校長】

- 新人教育は企業にとっては大変コストがかかり、離職率の件で高等教育機関に対する批判を受けたこともある。学生には、99%失敗を繰り返して最後の1%か0.1%で成功するものがうまくいくのだということを教えていきたい。

【議長】

- 社会、時代が大きく変化しているときで、AIで全てコンピュータ化され、現在ある職業の半分は要らなくなるという話もある。これからは、若者が転職を当たり前のようにする時代に入ってくるのでどう対応していくのが課題になるだろう。

[閉会 午後 4時03分]